

中村良平著

## 『まちづくり構造改革』

日本加除式出版株式会社（定価1,800円＋税、2014.3）

急ピッチで進む人口減少社会を迎えたまちづくりに真剣に取り組んでいる行政は勿論、生活環境の劣化に立ち向かってまちづくり活動をしている人達、更には、彼らと協働している専門家や学識経験者に、手元に置いておいて欲しい本である。具体的な活動の中で疑問が生じたとき、それを解くヒントを論理的に説明してくれる箇所が見つかるはずである。

本書は、「まちづくり構造改革」というタイトルに、これまでの「まちづくり」の考え方を変えるという意味と「まち」の構造を変えると二つの意味を込めている。まず一つ目の意味。「町の経済の仕組みを変える」もっと正確に言えば、まち（地域）の「産業連関構造を変える」ことこそが自立ある持続可能な地域経済を作り上げる基礎になるという信念に基づいて、その具体的な「地域経済構造分析」のやり方を説明している。地域経済構造分析とは、地域（まち）が、その地域にある比較優位な資源を見出して、それを有効に活用した財・サービスを生みだし、それを域外に移出することで地域内に資金を呼び込み、その獲得したマネーを域内で循環させることによって、域内での新たな需要と富の再配分が生まれるといった「地域経済の循環システム」に基本を置いた「持続可能な地域（まちの経済）」を探求するためのアプローチとしている。持続可能な地域経済とは、基本的に「自立できる経済シス

テムが継続していること」と定義する。直接的には「地域が自ら生活の糧を稼ぎ出すこと」であり、「どこから」という観点に注目すると、一つは自らが域外のマネーを獲得することであり、もう一つは域内で所得（付加価値）を生み出すことになるとし、前者の域内に資金を呼び込む力が「移出力」であり、後者の、域内にきた資金を循環させ流出を防ぐ力を「循環性」としている。この概念は、まちづくりを実践している当事者には、経済の門外漢であったとしても、現場で感じている可能性や違和感の根拠を論理的に説明してくれる。リアルな活動を下敷きにして本書を読み解いていくと「まちの産業連関」という考え方が理解でき、実践例の経済構造の循環図とその解説にも納得できる。

そして、二つ目の意味。筆者は、地域経済構造分析でこれまでのまちづくりの考え方を变えることから進んで、分析した構造をベースにして、種々の地域構造変革のシミュレーションを実施して、どのようなまちの経済の仕組み、つまり産業連関構造がその地域にとって望ましいかを考えるという実践例を紹介している。ここで提案されている産業連関表やシミュレーションの手法は、個別の活動を如何に総合化していくかということが急務になっているまちづくりにおいて、地域住民や関係者と行政が地域経営共同体を構築し、合意形成しながら戦略的に地域経営を実践していく中で、多様な関係者の理解を得やすい客観的な根拠として有効なツールになって行くことを期待させる。

本書で提示されている考え方や手法が、まちづくり活動を検証して、パワーアップし、新たな活動を創発していくことを願っている。  
(NPO法人まちづくり協会理事長 井上正良)